

## 原発事故から10年

## —火山地震神話の研究をしてきました。

寄稿 保立道久 歴史家／東京大学名誉教授

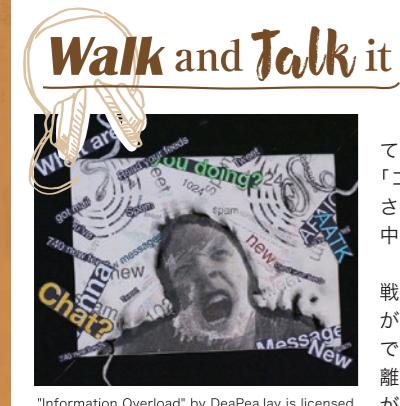
現在、世界に立ちはだかるコロナ災害は、価値観の大きな転換を社会にもたらしつつありますが、9年前の福島第一原発事故も、多くの人々の考えに変化をもたらしました。今号では、歴史家の保立道久さんにご寄稿いただきました。



いまちょうど倭国神話の神スサノヲが火山神であるという研究結果がでたところですので、まずそれを報告することにします。

スサノヲの父はイサナキ、母はイサナミです。ところが、イサナミが御産のときに死んでしまい、イサナキは彼女を蘇らせるのに失敗してしまいます。スサノヲは父親を憎んで母を恋いしたって「哭（な）きいさちる」、つまり泣き叫びます。そしてスサノヲは海の神だったわけですが、その役割を抛棄（ほうき）して姉のアマテラスのいる天に駆け上ります。「姉ちゃん！ 父さんがいじめる」という訳ですが、『古事記』によると、そのとき、天に上昇するスサノヲは「山川ことごとく動（とよ）み、国土みな震（ゆ）りぬ」という衝撃をもたらしました。山川の全体が鳴り動き、国土がドーンとゆれたということです。これは明らかに地震です。さらに『日本書紀』には「溟渤（おおきうみ）以て鼓（とどろ）きただよい」ともあるのですが、これは確実に津波です。

ポセイドンというギリシャ神話の神をご存じだと思いますが、ポセイドンも海の神であり、同時に地震の神でした。スサノヲとポセイドンは同じ種類の神なのです。私は、これは小学生も知っていた方がよいのではないか、地震列島に棲む列島人にとって必要な知識体系の一部ではないかと思います。



## Walk and Talk it 情報過多の疲弊から無関心・無行動に導かれる可能性—映画『ベルイマン監督の恥』

新型コロナウイルスの感染拡大により原発問題において、事故の際の被ばく回避と換気は両立不可であるため、「コロナ収束まで原発停止」という専門家の声明が発表されたが、所謂「コロナ経済危機」に人々の注目が集まる中、この声明はさほど注目されていない。

『ベルイマン監督の恥』(1968年)は戦争映画の中でも戦場や兵士が主題ではなく、平穏に暮らす人々の居住地域が突如戦場になるという想による異色である。孤島で暮らす夫婦のうちヤンは厭世的な人物で、世の動向から離れ、唯一の情報源のラジオが壊れても「何も知らない方が良い」といい直そうとしない。情報がないまま近所は爆

撃され、ヤンはやがて利己的な殺人を犯すことになる。

唯一の情報源がラジオである夫婦とは異なる私たちにとっても、情報過多の疲弊から無関心・無行動に導かれる可能性は常に存在する。「私は運命論者ではない」とヤンは語ったが、原発問題で稼働停止を要求するのは無論として、新しい労働・生活様式を「運命・常識」に囚われることなく選択していかなければならない。ベルイマンは恐らくヤンの行動を(避けられないことであっても)人間共通の「恥」としたが、「ラジオくらい直せ」というベルイマンの「聞こえない」声を記憶しておくことは、さほど難しいわけではない。(TH)

Energy  
Autonomy

もし本当に『風土記』から想定されるように、スサノヲの最後の地が須佐郷であり、だからスサノヲは「スサの男」と呼ばれたのだということになると、スサノヲが「遂に根国に就（い）でましぬ」というのは、スサノヲが火山の地下の国に行ったということになります。そしてその火山は三瓶山であったということになります。

よく知られているように、オホクニヌシはスサノヲのいる「根の堅州の国」(根の鍛（かた）すの国=地下のバルカンの国という意味です)に行ってスサノヲの娘のスセリ姫とともにそこを脱出してきます。これも火山の地下であることは、地下世界を脱出したオホクニヌシが「黄泉ひら坂」という長大な坂を下って逃げたと『古事記』にあることに明らかです。地下を脱出して坂を下って逃げたというのですから、これは火山頂上の火口から脱出して山を駆け下りました。

以上が、スサノヲは火山の神であるという理由ですが、そうだとすると「八雲立つ」というのは火山の噴煙ではないかと思いません。これはスサノヲ神話のみでなく、『出雲國風土記』の冒頭に、八束水臣津野命（ヤツカミズオミツノミコト）という出雲の祖神が述べたとされている出雲の枕詞です。この元の形は「八重雲」だったのでしょう。つまり、天孫降臨神話は天孫ニニギノミコトが、大噴火を起こした霧島火山の噴煙に乗って「天の八重雲」を押し分けて降臨してきたという神話ですが、出雲の「八雲立つ」の八雲は五七調の歌にあわせるために「八重雲」を「八雲」に変えたのだと思います。

さて、私は、3・11の後に地震史・火山史の研究を始め、そこを切り口にして神話研究の世界に入りました。その結論は、倭国神話は火山地震神話だということです。ここではスサノヲの神話を例としましたが、そもそも倭国神話の祖神である高御産巣日（タカミムスヒ）という神はギリシャ神話のゼウスと同じく、巨大な雷電の使い手で、雷電によって火山噴火を起こす神です。ギリシャと日本列島はどちらも火山地震地帯ですので、神話も似てくるのです。

日本の学者の中で、正面から日本の神話を大事にすべきだという人はきわめて少ないといます。人々も神話に興味をもっていません。私が想起するのは、3・11の直後、「安全神話」という言葉をしばしば聞かされたことです。日本社会では、決定的な問題の修飾語として宗教的な意味をもった言葉が使われることがあります。たとえば第二次大戦の敗戦後に使われた「一億総懺悔」という言葉、「国民みんなが悪かった」という言葉です。「安全神話」というのもそれと同じで、「安全神話」に流れていたんだなどというように、事態の経過や責任を曖昧にする力をもって流通しているように思います。人々は原発事故について怒り、批判する場合も、まずそれを神話のように信じ込まされていたことに驚き、そこに自分たちの反省を重ねようとしているようにもみえました。

こういう一種の愚直さは、「無宗教」といわれる、この列島に棲む人々の意識のあり方に関係するのでしょうか。現実には、原発が安全であるというのは無知への堕落であるか、金に飽かせた宣伝の効果であった訳ですから、率直

にいって、私はそこに「神話」という言葉をもってくるのは罰当たりだ思います。ただ客観的にいえば、このような言葉遣いは、人々にとって「神話」というものが他人事であり、神話が文化の外に存在していることを示すでしょう。このような文化の非神話化は、いうまでもなく、アジア太平洋戦争を引き起した日本の天皇制国家が、皇国史觀といわれる神話イデオロギーによっておおわれていたという事情です。その解体が日本社会から文化としての神話を一掃してしまいました。

しかし、現在になってみれば、皇国史觀は「アマテラス=万世一系の天皇」というイデオロギーに過ぎず、アマテラス中心主義イデオロギーによって倭国神話の実態を隠したというのが事態の本質です。それは明治以来、神話研究の自由を抑圧して紋切り型を繰り返してきたことの結果でした。私は、3・11の震災と原発事故を経験した人文科学にとっての一つの再出発点は、以上のような倭国神話の実態を否定しがたい形で明らかにすることにあると考え続けてきました。倭国神話が地震や火山噴火などの地殻災害の神話的な反映であるとしたら、今こそ、日本近代が神話の実態を明示する研究を発展させることができなかつた歪みを取り戻すべき時だということです。

「神を信じるものも信じないものも」という言葉がありますが、それは神話的的心情あるいは神道的な心情についてもいいくことではないでしょうか。現代日本では神話的的心情あるいは神道的な心情といっても、その実態は簡単なものではありませんが、しかし倭国神話が火山地震神話を軸とする自然神話の色彩を強く帯びていること、また神道がそのような火山地震神話をふくむ神話時代以来の自然崇拜のシステムを受けついでいること、それらを事実として確定することは、「皇国史觀」とアジア太平洋戦争以来の歴史意識の負債を精算することにつながるでしょう。これは一例ですが、この10年の経験は、私たちがこの国の宿痾から解き放たれるためには、すべてを点検し直す必要があることを示しています。

ご寄稿全文をこちらでご覧いただけます

<http://coalitionagainstnukes.jp/?p=14209>

保立道久

歴史家。1948年東京生まれ。1973年、国際基督教大学教養学部卒業、1975年、東京都立大学人文科学研究科修士課程修了、その後、東京大学史料編纂所助手から、史料編纂所教授、2005年より2年、史料編纂所長。現在、東京大学名誉教授。

著書は『現代語訳老子』(ちくま新書)、『歴史のなかの大戦動乱』(岩波新書)、『中世の國土高權と天皇・武家』(校倉書房)、『日本史学』(人文書院)、『物語の中世』(講談社学術文庫)、『かぐや姫と王権神話』(洋泉社新書)など。本来は中世の「社会史」の研究者でしたが、「老子」の注釈作業をした後、現在はもっぱら倭国神話論に専攻を変えています。日本史の通史や歴史理論について考えたことを無事に活字にしてから死にたいものだと思っています。

ブログ：【保立道久の研究雑記】 <http://hotatelog.cocolog-nifty.com/>  
<https://note.com/michihisahotate>

ツイッター：<https://twitter.com/zxd01342>

## 現代語訳老子

保立道久(著) ちくま書房 1,210円(税込)



『老子』は、人の生死を確かに目で見つめ、宇宙と神話の悠遠な世界を語る、苛烈な戦国時代を生きた一人の思想家の姿を伝えている。『老子』はまた原始共産主義と民衆反乱の書でもあったから、現代中国の混迷を根底から批判するための基準となるだろう。本書はテーマによって『老子』全章を整理し、謎に包まれたテクストを明快に解きほぐし、さらにそこに日本の神話と神道の原型を発見することを試みる。現代に必須なのは『論語』よりも『老子』の体系的な思想だろう。

<http://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480071453/>

## 編集後記

コロナ災害で安倍政権の愚かさが明確に可視化されています。最近では、利権関係を重んじ実施したGo To トラベルキャンペーンは不評で、自らお盆帰省などを自粛する人々が多数。政府は脱原発を望む圧倒的国民世論を無視し、今井尚哉総理秘書官のリードで原発を維持・推進しているが、これも一部の既得権益者のためであり、国民意識から大幅に乖離している。

入閣時に脱原発を支持する自身のエントリーを削除した河野太郎防衛大臣だが、最近、ブログで原発も再処理も必要ないという見解を匂わせる投稿をした。黒川問題やコロナ対策の不評で、官邸主導の政治の求心力が党内で低下しているのだろう。自民党内の隠れ脱原発派はしっかりと表に声をだすべきだ。原発問題もコロナ災害も、傷が更に深くなる前に政権交代を！